

ユダヤ教における異邦人と改宗者について

この動画は、ユダヤ教における異邦人(ゴイム)と改宗者(プロセリュトス)、そして神を恐れる者(ゴッド・フィアラー)という概念の変遷、およびユダヤ教の宣教的側面について解説します。

1. 「使徒の働き」における異邦人、改宗者、神を恐れる者

語り手はまず、「使徒の働き」に頻繁に登場する「神を恐れる者」や「神を敬う改宗者」といった表現に着目します。

「神を恐れる方々」(使徒13:26): パウロがシナゴーグで語る際、ユダヤ人とともに神を恐れる人々がいたことが示されます。

「神を敬う改宗者たち」(使徒13:43): 街道での集会後、多くのユダヤ人と共にパウロとバルナバに従った人々として記されています。

「神を敬う大勢のギリシア人たち」(使徒17:4): パウロとシラスに従った人々の中に、ギリシア人も含まれていたことが言及されています。

「神を敬う人」(使徒18:7): テティオ・ユストという名の神を敬う人の家にパウロが入ったことが記されています。

これらの記述から、「神を敬う人」や「神を恐れる人」とは、ユダヤ教の神を敬い、ユダヤ教やユダヤ人に共感を抱いていた異邦人を指すと解釈されます。

2. 旧約聖書における異邦人の位置づけ

語り手は、このような異邦人の存在が、旧約聖書における異邦人の描かれ方とは異なる側面を持つことに疑問を呈し、旧約聖書における異邦人の扱いを以下の3点にまとめます。

忌み嫌うべき存在、滅ぼすべき存在:

申命記18章9-12節では、「違法の民の忌み嫌うべき慣習」を真似てはならないと記されています。

ヨシニア記などでは、カナンの地に入るイスラエル人に、そこにいる民族を滅ぼし尽くすよう命じられています。

これらの記述は、ユダヤ教にとって異邦人の文化や習慣は敵対的であり、忌み嫌うべきものと見なされていたことを示唆します。

神の罰を下す道具:

特に預言書や列王記において、アッシリアやバビロンのような異邦の国々が、ユダヤ人が罪を犯した際の神の罰として用いられた側面が強調されます(例:ネブカドネザル)。

終わりの日に主に立ち返る者:

イザヤ書2章2-4節では、「終わりの日」には「主の家の山」に「すべての国々が流れ込んでくる」と預言されており、異邦人も神を求めるようになるとされています。これはユダヤ教の終末論における基本的な考え方であり、異邦人もまた、自らの偶像崇拜を捨て、イスラエルの神に立ち返ると考えられていました。

3. 旧約聖書における「在留者(ゲール)」と新約聖書における「改宗者(プロセリュトス)」

語り手は、旧約聖書に登場する「在留者(ゲール)」という概念にも注目します。

「在留者(ゲール)」:

出エジプト記12章19節では、「在留者でもこの国に生まれた者でも」イスラエルの会衆から断ち切られるとあり、在留者もイスラエルの会衆に含まれることを示唆しています。

レビ記24章22節では、律法が「在留者であれ、この国に生まれた者であれ、あなたがたには同一である」と記されており、律法が在留者にも適用されたことがわかります。

「ゲール」というヘブライ語は「一時的に滞在する者」という意味を持ちます。

「プロセリュトス(改宗者)」への変化:

ヘブライ語の「ゲール」は、ギリシャ語の七十人訳聖書(セプトゥアギンタ)で「プロセリュトス」と翻訳されます。

「旧約聖書と新約聖書の間の時代」に書かれた外典では、「プロセリュトス」がイスラエルの神を信じる人々、すなわち「改宗した者」という意味で使われるようになります。

新約聖書では、この流れを受けて「プロセリュトス」が「改宗者」と翻訳されています。

4. 改宗者(プロセリュトス)と神を恐れる者(ゴッドファイラー)の区別

語り手は、「プロセリュトス(改宗者)」と「ゴッドファイラー(神を恐れる者)」には違いがあると説明します。

プロセリュトス(Proselyte):

元々は異邦人であったが、ユダヤ教の律法を完全に守り、神を信じて完全に改宗した人々を指します。考古学的調査でも、紀元2世紀から6世紀のシナゴーグの遺跡からギリシャ系の名前が多く発見されており、彼らがプロセリュトスであった可能性が指摘されています。

ゴッドファイラー(God-fearer):

ユダヤ教の律法に关心は持っているものの、完全にユダヤ教の会員にはなっていない人々を指します。ユダヤ教へのコミットメントの度合いには様々なグラデーションがあったと考えられています。

5. ユダヤ教への改宗の条件と論争

語り手は、研究者シフマンSchiffmanの説として、改宗者になるための条件として以下の4つがあつたことを紹介します。しかし、これらの条件には様々な論争があることも指摘しています。

トーラーへの献身:律法を完全に守ること。

水に浸かること(バプテスマ/洗礼):キリスト教の洗礼のように一度で終わるものではなく、イニシエーション的な意味合いも疑問視されています。

神殿への生贋:神殿が破壊された後には、この実践は変化せざるを得ませんでした。

割礼:アレクサンドリアのフィロンのように、肉体的な割礼ではなく「考え方や思いを神に捧げること」と解釈する者もあり、厳密に守られていなかった可能性が指摘されています。

これらの論争は、ユダヤ教内部でも多様な立場が存在していたことを示しています。

6. ディアスポラのユダヤ人とシナゴーグの役割

語り手は、ユダヤ人のディアスポラ(離散)が紀元70年の神殿崩壊よりも前から始まっていたことを指摘します。

ディアスポラの歴史:

北イスラエル王国のアッシリアによる滅亡、バビロン捕囚など、古くからユダヤ人はパレスチナ以外の地域に散らばっていました。

紀元前にはアンティオコス4世による強制移住や、ローマのポンペイウスによるローマへの移送なども行われました。

アレクサンドリアには多くのユダヤ人が住んでおり、またダニエル書やエステル記にあるように、バビロンに留まったユダヤ人もいました。

ディアスポラの規模:

紀元1世紀頃には、世界中に散らばったユダヤ人の総人口は500万から600万人と推定され、これは当時のローマ帝国全体の人口の約1割に相当すると考えられています。

シナゴーグの特権:

各地のシナゴーグは、ローマ帝国との交渉を通じて、礼拝の自由、エルサレムへの献金、皇帝礼拝の免除、安息日の遵守といった特権を享受していました。

これらのシナゴーグには、ユダヤ人だけでなく異邦人も「神を恐れる者」として参加しており、中にはユダヤ教に改宗する者もいました。

7. ユダヤ教の宣教的側面に関する議論

語り手は、ユダヤ教が宣教的な宗教であったかどうかについて、過去と現在のコンセンサスを比較して説明します。

過去の説(宣教的):

かつては、ユダヤ教は宣教的な宗教であり、異邦人にイスラエルの神を伝えようとしていたという説がありました。

エレミアスのような研究者は、この説を支持し、イエス・キリストの働きもその流れの中にあったと解釈していました。

「神を恐れる者」や「改宗者」の存在、そしてユダヤ教の神が普遍的な神であるという思想が、この説の根拠とされました。

現在のコンセンサス(非宣教的):

現代のコンセンサスは、「ユダヤ教は全く宣教的な宗教ではない」というものです。

「神を恐れる者」や「改宗者」は確かに存在したが、それは「たまたま生まれたもの」であり、ユダヤ教に「何としてでも改宗者を出さなければならない」という宣教的な側面はなかったと考えられています。

彼らがユダヤ教に共感を抱くようになったのは、ユダヤ人たちの「良い行い」を通じてであり、ユダヤ教の目的は異邦人を改宗させることではなく、自分たちが律法に従った生き方をし続けることにはあった、というのが現在の見解です。

8. キリスト教とユダヤ教における宣教の比較と示唆

語り手は、ユダヤ教が「非宣教的」であるという現代のコンセンサスから、キリスト教の宣教的側面について考察します。

キリスト教の宣教的側面:

キリスト教は最初から宣教的な宗教であり、福音が誕生と同時に伝えられてきました(使徒の働きに記されている通り)。

宣教がキリスト教の大きな前提であることは重要ですが、宣教的な側面だけが強調されすぎると、「言葉だけ」になってしまう弊害があると語り手は指摘します。

ユダヤ教の「非宣教的」側面からの示唆(生活宣教):

ユダヤ教が非宣教的であるとは、周りの人々を改宗させることを目的とせず、自分たちが「良い行いをし続ける」ことに焦点を当てていた姿勢を指します。

シナゴーグへの異邦人の参加を禁じることはなく、生贊なども部分的に許容しましたが、積極的に勧めることはませんでした。

語り手は、この「律法に従った生き方をし続ける」というユダヤ教の姿勢が、結果的に異邦人たちが信じるきっかけを作ったことを強調し、これを現代のキリスト教における「生活伝道」の重要性と結びつけています。

結論:

ユダヤ教と異邦人の関係を考えることは、現代のクリスチヤンとノンクリスチヤンの関係を考える上で重要なヒントになると語り手は結論付けています。つまり、言葉による宣教だけでなく、律法に従った(聖書に書かれている通りの)良い生き方そのものが、他者を神へと導く力を持つという示唆です。